

朝日 歌壇 俳壇



〈サルスベリVI〉 日高理恵子

『宇宙人のためのせりふりゅう入門』(左右社)は、道で偶然拾った宇宙人「せりふりゅう」と、著者であり川柳人である春田真名との奇妙な七日間の共同生活の物語だ。そして現代川柳について話す二人の会話形式で展開される川柳入門書でもある。

川柳というところの多くの人が思い浮かべるのがサラリーマン川柳やシルバー川柳といった社会や時事をダジャレや自虐まじりのユーモアで詠むスタイルだろう。

短歌時評 令和時代の川柳

五時過ぎた カモンベイベー USA
ばらし 盆踊り
残葉がなければ川を見て帰る 榎崎進弘
右がサラリーマン川柳で左が現代川柳。「フリが違えば」と宇宙人からでさえもともな指摘が入るようになり、同じ「退勤後の過越し方」でもこれだけ目指すものが異なる。「現代川柳の特徴は『普通』からこぼれ落ちていくこととするもの。目を向けていること」だと著者は言う。

島二つどちらを姉と呼ぼうかな 小池正博
むしゃくしゃしていた花ならなんでもよかった 平岡直子
未来はきつと火がついたブリクラ 暮田真名
どちらも姉たりえない前提を「かな」という気分の軽さでかわす一句目。無差別に人を傷つけた犯人の発言を下敷きにする二句目。三句目、過去の象徴であるブリクラを燃やして来る未来とは。著者がい「わからなくておもしろい」感覚を肯定することが詩を好きになるヒントだと。現代川柳がいま熱い。(歌人)

坪内稔典著「古い俳句——君とつるりんしたいなあ」帯に「古いと俳句の関係についての考察も、おさおさ怠りない、快進撃のエッセーである」。(ウェブ・1760円)

第14回北斗賞 文学の森主催。名古屋市の若林哲哉さん(25)の「臍口」(150句)に決まった。俳句の未来を開く若い俳人を輩出することを目的にした賞で、40歳までが対象。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほかき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合がある。

大串 章選

泣初^{なみ}の赤子を抱いて初笑^{はつみ}い (相模原市) 松尾 貢
一月や死語^{しご}を笑しむ同期会 (香芝市) 土井 岳毅
スタートは思ひ立ちし日大枯^{おほく}野 (仙台市) 柿坂 伸子
卒寿^{そじう}なほ迷ふ日のあり西行忌 (八王子市) 徳永 松雄
国境に戦車一台除夜の月 (静岡市) 松村 史基
灯台はユトリロの白初^{はつ}御空 (奈良市) 田村 英一
星飛^{ほし}ぶが如く一瞬去年今年 (長崎市) 下道 信雄
願ふより決意を誓ふ初詣 (石川県能登町) 龍上 裕幸
忘年会を望年会に変へてゐる (糸島市) 小川 雄峰
悪友と縁を切れずに年賀状 (新庄市) 三浦 大三

【評】第1句。新年の和やかな雰囲気。「泣初」と「初笑い」の取合せが好い。第2句。昔馴染の同窓会、みな年取ったのだ。「死語を笑しむ」がおもしろい。第3句。爽やかな即断即決、「大枯野」も何のその。「思ひ立ったが吉日」という成句もある。

高山れおな選

あかんたればかりの御代^{みよ}や近松忌 (大阪市) 上西大信
ころころもかきねて冬^{ふゆ}もり (草津市) あびこたろう
焼^{やき}膳^{だん}の皮パソコンに置いたのだれ (垂水市) 瀬角 龍平
お元日能登の地震に暮れにけり (伊丹市) 保理江順子
もの忘れ冬至風呂にもおよびけり (千葉市) 竹下 史郎
初日影巻き込みて波寄せにけり (東かがわ市) 桑島 正樹
息白き馬や我らや古都を行く (ドイツ) ハルトォーク洋子
黒猫の目玉澄みゆく久女の忌 (平塚市) 日下 光代
寒林やキョウ撃ち男身をかめ (東京都大島町) 大村 森美
キッチンに庭の水仙五六本 (箕面市) 中島 淳子

【評】上西さん。大阪弁が利いている。あびこさん。地口が楽しい。ちょっと珍しい冬籠りの風情。瀬角さん。ちなみに「誰/だれ」も切字の一種。保理江さん。地震は午後四時過ぎ。夜にかけて被害甚大が明らかに。痛恨の「暮れにけり」。

小林 貴子選

地震・津波・空港惨事・また二日 (東大和市) 板坂 壽一
雪は嫌なのに初雪待つ不思議 (金沢市) 飯野日々子
おなじ街おんなじ店で日記買ふ (さいたま市) 藤川比早子
落選にへこたれぬ年惜しみ詠む (横浜市) 飯島 幹也
噓まで可愛き人でありにけり (静岡市) 松村 史基
元旦のきれいなねくら動物園 (小平市) 原田 昭子
大標ちやらんぼらんと葉を落とす (熊谷市) 内野 修
湯湯婆たぶん羊水の中の内 (甲府市) 辻 基倫子
柚子風呂にややがあらんと遊ぶこと (新居浜市) 越智 勝利
三度目の正月犬はもう大人 (藤沢市) 青木 敏行

【評】一句目、穏やかな年始が、いきなり衝撃に変わった。地震よ鎮まれ。二句目は金沢市からの投句だが、これは地震前の作品と思う。三句目、このようにほっこり続く日常を大切に。四句目、投句の99%以上は落選なので、へこたれないで。

長谷川 權選

新聞の黙元^{もくげん}日の大地震 (岐阜県揖斐川町) 野原 武
女湯に「ごもの声の柚子湯かな (川崎市) 小関 新
一茶とは愛の人ならむ小正月 (さぬき市) 鈴木 幸江
孤独との付き合ひ方を日記買ふ (富士市) 松村 敦規
白息や深しと思ふ空のいろ (栃木県高根沢町) 大塚 好雄
亡国の二世三世忘年会 (川崎市) 多田 敬
鯛焼は小春日の味人集ふ (東京都品川区) 田中 隆
禿頭といふ潔き初鏡 (須賀川市) 伊東 地肌
男には好かれる男餅を掲ぐ (栃木県壬生町) あらみひとし
暦だけ年越す様や侘び住まひ (長崎市) 下道 信雄

【評】一席。翌日の朝刊は休み。言葉を失ったかのように。二席。隣の女湯から子どもの声が。柚子色の声である。三席。愛も憎しみも何はばからず句にした人。まちがひなく「愛の人」。十句目。暦だけが新しい。この簡素さこそお正月。